

郷土室だより

第131号

平成20年6月30日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 20-029

「変りゆく都市像」(10)

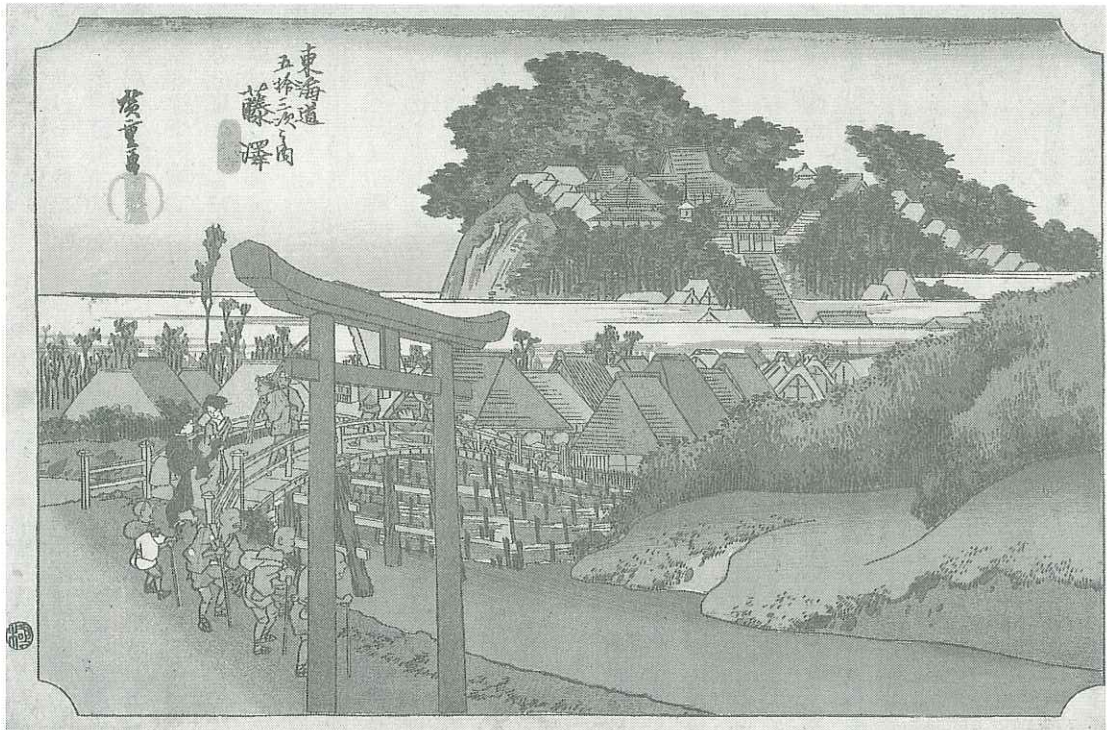
旅行く人々

◇主要街道の宿駅

前号で旧徳川領に進駐した大名とその禄高を『角川日本史辞典』中の「豊臣時代大名表」(以下「大名表」と略称)で概観し、それと対比させる意味で家康の新領土の中心であった「武蔵の場合」の「大名表」も紹介した。

ただしその「大名表」では家康自身の所領高は二四二万石で、本拠を江戸に置いたことは記されているが、そのほかに豊臣政権の重臣としての「上洛費用分」として「江州九万石と江州石部・勢州関地蔵・同四日市場・同米野・遠州白須賀・同中泉・駿州清見寺に各一千石と駿州島田に二千石と計九千石」の存在があることが省略されている。これは家康の上洛費用分として古代以来の東海道の要所の宿場に所領を与えられていたことを物語るもので、案外に見落とされているが、家康が秀吉から秀頼の後見を委嘱されていたことに対する《必要経費》であったことはいまでもない。

なぜこのようなことを取り上げたのかというと、家康は慶長八(一六〇三)年の幕



藤澤「遊行寺」：保永堂版

府開設と同時に五街道による宿駅

◇中世の旅人の役割

制度を創設したように説明されているが、実際には近江の石部・伊勢の関地蔵・四日市(場)・米野・遠江の白須賀・中泉・駿河の清見寺・島田といった「近世の東海道」沿道には、古代・中世以来の宿駅のある地点が、そのまま宿駅として利用されていたことがわかる。また近江・伊勢以外の宿駅はほかならぬ家康の旧領土であったことも見逃せない。

話が逆になってしまったが、とくに東海道の場合には十二世紀末の鎌倉幕府の創設で、京都と鎌倉間の交通路が特別に重要になったために、その宿駅ルートはあまり荒廃せずに、この時点まで温存されていたのを、家康が復興したと見ることも出来る。

このことは東海道に限らず、全国的主要道路に共通的なことであった。戦国乱世の時代でも人々は主要な道路を利用して旅行をしていたことは勿論だが、いったん形成された「道路」というものは、時代や社会事情が大きく変わったとしても、そう簡単に変更されるものではなかったのである。

現在のような通信・交通手段が

なかった時代には、大部分の人は生れた土地以外の世界を知らずにその生涯を終えた。しかしある程度の生活手段を持った階層には自分の勢力範囲を取り巻く「世間」の状況を知ることが、誇張ではなく生命にかかわる事柄であり、それゆえに「外界」の情報をもたらす旅人は「賓客」として、また「まればと」(稀な人)《まろうど》(貴重な客人)として待遇した。

また熊野の御師たちのような伝道キャラバンの周回コースから離れた孤立的・閉鎖的社会では通婚圏が狭まり、その結果として血族結婚を重ねるために「血が濃くなって」精神的・身体的障害を持つ子の誕生率が高くなる。その弊害を避けるために外から「新鮮な血」を求める行為にもつながった。このことは当事者にとってはその所属する社会を維持するための必死の行為でもあった。それに応じた旅行者も当時では唯一の情報伝達手段そのものとしての意味を持つものであった。

これは現在では民俗学や社会学の領域における「歴史的」とされる事柄だが、誇張ではなく現在の東京都内でも「血が濃くなった」家系を多く持つ地域では独特な社会景観を出現させている場所があるように、単なる《おとぎ噺》ではなかった。

注 旅行は集団で

「治安」という制度が確立しない時代や場所にあつては、「木枯らし紋次郎」的な一匹狼

の旅行は中世までは事実上は不可能であった。宗教者の場合も同じで歌舞伎の「勧進帳」で代表される山伏集団のように、ある程度の武力を持たなければ、山野をかき分けた旅行は出来なかつた。ある研究者によると義経・弁慶一行は安宅の関から、奥州平泉まで《あれだけの集団》でも約二年も掛かっていたという。

十三世紀に一遍が創始した時宗の場合も同じで、集団が舞踏念仏を唱えながらの廻国は、山伏集団の旅行の場合と同じ理由によるものである。

また紀州の熊野三山に成立した多数の御師たちの宿房を根拠地とした、伝道キャラバン(隊商)が広範囲に活躍したことは、現在でも確認できる全国的な熊野神社の分布状況だけを見てもそのことが証明されよう。

それは、御師たちは行く先々の豪族との間に「講」という名で師檀関係(信仰契約)を結び、相互に利得を約束する関係を獲得した。

そうした中で、とくに江戸地方の場合には古代末から室町時代に掛けて、熊野信仰が著しく普及し、大小の豪族の殆んどが、熊野の御師の先達との間に師檀関係を結んでいる。その状況の一端は例えば「江戸氏苗字の書立」といった熊野御師文書で見られるように、現在の皇居の場所にあった江戸氏とその支族が、ほぼ現在の二十三特別区の範囲に分散して、六郷・渋谷・丸子・中野・阿佐ヶ谷・板倉・石浜・芝崎・国府方などといった地名を名乗っていたことなどが、それぞれの『区史』にとりあげられているように、本家の信仰する熊野権現をそれぞれの地名を苗字に

した分家でも信仰していた状況を示すものとして、文書に記録されて現在まで伝えられている。

その文書の内容は相互の厚い信頼を元に、現東京都区内にいた豪族たちは、熊野の御師たちに通行人の安全と宿泊を保証し、その見返りとして熊野の御師たちは熊野信仰の取次契約した（豪族の熊野参りの際の宿坊の提供）を始め、世間の「うわさ」「風説」といった情報を提供し、すべての契約書や誓約書の用紙であった「熊野牛王」を始め種々の「情報関連のモノ」を売った。

また注目したいのはその御師と地方豪族との間の契約関係を証する「講」に関する登記簿が、御師の拠るところの熊野各社の宿坊ごとに作成されていて、それに記載された「講」の権利書が御師たちの間で売買・相続・交換の対象にもなっていたことである。

注 熊野牛王「牛王宝印」の略

称。厄除けの護符で裏面は烏を圖案化して印刷された用紙で、起請文を書くときに使った。これに書かれた約束を破るとあらゆる神仏から、神

罰・佛罰を受けることが明記されている《御札用紙》である。

◇時宗二大寺の場合

熊野だけではなく仏教宗派の場合も見てみよう。この場合はこれまで再三引用・紹介してきた一遍が開いた時宗の動向の代表的な場合を『全国寺院名鑑』北海道・東北・関東篇（全日本仏教会寺院名鑑刊行会・昭和四四年刊）で見ることにする。この分厚い名鑑の編集方法は所定の様式を用いて各寺院が執筆したものを、刊行会が取りまとめたものであることに特徴がある。

まず相模原市当麻五七八の「当麻寺大本山 無量光寺」の項と、藤沢市の「藤沢山無量寿院清浄光寺」の項をそのまま紹介することにする。（句読点はそのまま、引用に際して読みやすさのために改行し、字間を空けた部分もあり、年号には西暦を入れた。）

「当麻山無量光寺」

「当麻山金光院と号し、弘長元年（一一二六）創建開山は一遍。

も当麻道場とも称した。一遍諸国巡錫の際当地にいたり、里人の願いにより一字を建立、現院号を称し京都にさった。のち

文永七年（一一七〇）、弘安四年（一一八二）の二度当寺を訪れたがついにこれを法弟智得に付与した。正応二年（一一八八）一遍入寂。嘉元元年（一一三〇）智得の法兄真教は師の遺命により当地に留錫、堂宇を創修建し、現山院号寺号を称した（当麻山金光院無量光寺）。この時一遍を開山一世とし、みずからは二世となり、のち智得が三世の法灯をついだ。

真教は智得に日本六十余州を遊行させたが元応元年（一一三九）、ときの執権北條貞顕から、遊行のかたわらひそかに天下の動静を探ることを命じられたが真教はこれをことわった。幕府はさらにその法弟の吞海に命じたので真教はこれを破門、以来

当山の僧は世の疑惑を解くため遊行を廃した。元応二年（一一三二）智得示寂し法弟真光が四世となったとき、吞海は藤沢に一字を創建し、藤沢山無量光院

清浄光寺と号し遊行教化した。以来清浄光寺と確執、両寺対抗の形勢となったが当寺はみずから一門の宗風を保った。

天正十九（一五九二）年徳川家康から寺領三〇石、境内立入禁止の朱印をうけた。これは徳川家の遠祖有親、親氏の旧跡であったためといわれる。創建以来堂宇は整備し、境内広壮で優美を極めたが安永二年（一七七三）および明治二十六年（一八九三）の二度火災にあつて焼失のち再建して現在にいたる。」

「遊行寺総本山 清浄光寺（藤沢市西富二〇八）」の項には「藤沢山無量寿院。遊行念仏根本道場で開祖一遍諸国遊行念仏教化を行なったのでこれになり、歴代の宗主もまた廻国遊行をなし俗に遊行上人といひ本寺を遊行寺ともいふ。」

京都金光寺に住していた吞海が本宗四世の法灯をつぎ、海内を遊行諸国に道場を創建、正申二年（一一三五）相模俣野郷の地頭俣野五郎景平を開基としその援助により現在地に当山を興

した。

延元三年（一三三八）六世一鎮の代、足利尊氏から寺領六万貫の寄進をうけ、堂宇を修造また後光厳天皇より清浄光寺の勅額を賜わった。堂宇は尊氏の修理後火災で焼失したが、上杉中務朝宗が再興し、百坪の客殿を寄進した。十二世の尊親法親王は、一品式部卿常磐井恒明親王（龜山天皇第二皇子）の第四皇子深勝親王で、かつて後村上天皇の東宮だったが南朝ふるわずために廃され落飾して尊親法親王と称し、法灯をついだ。以来南朝門跡となり寺運は大いに栄えた。ついで応永四年（一三九七）後小松天皇はさらに勅して、「当遊行寺はかつて南朝の東宮であったから遊行化益は一に天皇巡狩の例に準ずること」とされ、將軍足利義満はこの旨を諸国の守護職に命じたので、遊行上人の遊行する所、宿所食事、使役など類例のない優遇を受けた。また代々遊行上人はとくに参内を許され、称光天皇はじめ累代皇室の帰依あつく、国家安全の祈祷輪旨を賜わった。將軍家も

また遊行上人の交代ごとに教書
を發して知らせるのを例とし
た。（後略）

つまり当麻の方は二世真教が、
北条氏から《遊行しながら天下の
動靜を探る》ことを持ちかけられ
たがそれを断り、藤沢の方は四世
呑海が幕府と南朝・北朝三つ巴の
勢力争いの中で、《天下の動靜を探
る役目を引き受けた》のである。
これが両寺のその後の動向を左右
したのだが、このことからも時宗
内の動向とは別に「山伏・聖・遊
行」などの一面がうかがわれる。
なお藤沢遊行寺の「歳末・別時念
仏会」には《熊野権現の神体をか
ざり、仏像・仏図がないのが特徴》
とされていた。

◇一向宗と鷲宮の場合

また一遍の弟子であった一向が
起こした称名念仏の一派である一
向宗は、十五世紀後半から急速に
普及した。その代表的な例を挙げ
ると文明三年（一四七一）には蓮
如が興した北陸の吉崎道場、明応
五年（一四九六）にはこれも蓮如

が拠った石山道場（後に豊臣秀吉
の大坂城本丸の場所になった石山
本願寺）をはじめ、畿内には数多
くの一向宗の寺院ができ、その境
内に寺内町を成立させて、周囲の
武家勢力に対する防備を固めるよ
うになった。

また戦国時代の最盛期にはそれ
までの守護・地頭に対する「一向
一揆」が、広範囲に起こったこと
もよく知られた事柄である（この
一向宗は安永三年（一七七四）に
浄土真宗と改称した）。

先進産業地帯を形成し始めた畿
内では、この宗派の寺院の境内に
いち早く寺内町が形成されたとい
うことは、それが「いちば」の成
立というよりも、農民社会の中に
商工業者に分類される階層のもの
が発生・増加したことを示すもの
で、これは農民を中心的な基盤と
した一向宗が、商工業者にも広が
ったことを示すものであった。

ここで想起されたいのは、この
シリーズ(9)（第二三〇号）中の「市
場之祭文」のことである。すでに
見たように埼玉平野を舞台にして
成立した延文六（一三六一）の日
付の入った「市場之祭文」をよく

検討してみると、貨幣の登場を思
わせる記事は見当たらない。

鷲宮で代表される「和市」は寺
内町という形式ではなく、まだ「あ
る場所における物々交換」の《い
ちば》だったとも考えられる。

しかし、それに対して畿内の寺
内町ではどうだったかということ
もまだよく分からない。畿内の寺
内町に対する最大の関心は「世界
文化遺産」的な城郭に似た建築物
に対する興味にとどまっっていて、
貨幣を輸入した堺の津を始めとす
る大阪湾内の幾つかの湊に近い地
元の寺内町では、当然貨幣が通用
していたと考えられるが、それぞ
れの地点での具体的なデータは不
十分である。（つづく）